

【68年5月／女性】

## 性の差異と平等をめぐって ——1968年とフランスにおける女性解放運動（MLF）

佐藤 香織

（首都大学東京・非常勤講師）

### 1. MLFの背景

性差について語る時、実のところひとは何について語っているのだろうか。フランスにおいてこの問いが明確に主題化されたのは、1968年以降の女性解放運動においてである。20世紀以降のフランスの女性運動の文脈のうちで、この運動をどのように位置付けるべきか、振り返って検討してみよう。

20世紀前半までの女性運動において性差とは主に男女間での政治的不平等を意味し、運動はその是正を目指していた。この運動が成果をあげてフランスで女性が条件なしの選挙権および被選挙権を獲得した<sup>1</sup>のは第二次世界大戦末期の1945年である。同年10月に行われた総選挙においては、545名の議員のうち35名の女性議員が、1946年には618名のうち39名の女性議員が生まれた（Laubier, 1990, 1）<sup>2</sup>。

戦後、1949年に出版されたボーヴォワールの『第二の性』は社会的性差に着目した理論的書物としてよく知られている。女性が政治参加の権利を得た後も、フランスでは1804年のナポレオン法典以来の婚姻・家族法が保持されており、避妊や中絶はいまだ合法化されていなかった。ボーヴォワールの「ひとは女に生まれるのではない」というよく知られた言葉は、性差が生じる次元を問いに付すものだ。ボー

<sup>1</sup> 1944年8月25日、ド・ゴールによって女性の選挙権および被選挙権が認められ、女性たちはこの権利を1945年4月29日に初めて行使した（Laubier, 1990, 1）。

<sup>2</sup> Laubierによれば、より女性に開かれていたのは共産党であった。（Laubier, 1990, 1）。

ヴォワールはこのとき、社会的性差が生物学的性差に先行すると述べようとしている。その目的は、女性も男性も同じくひとりの人間であると述べることで、両性間の差異を人間にとって根本的なものとみなすことは妥当ではないと告発することであった。たとえばクリステヴァが指摘するように、ポーヴォワールの初期の小説を貫いている問いは、「女性とは何か」というよりは「私はどうしたら自由になれるか」というものであった (Kristeva, 2016, 43-44)<sup>3</sup>。さらに『第二の性』序文においてポーヴォワールは、自由を「現代における幸福の意味」と述べている。ポーヴォワールが社会的性差の問題の背後に見ていたのは、一個の実存者の自由の問題である。

『第二の性』の出版は話題になった<sup>4</sup>が、それ以降1968年に至るまでの間、フランスで女性運動をめぐる大きな変化は生じていなかったように見える<sup>5</sup>。じっさい、性差をどのようなものとして捉えるか、そして性をめぐる運動は何を目指しているのか、といった問いに対する議論が活発になされるようになったのは、1968年に母体ができ、1970年に公の場で活動を始めた「女性解放運動」(Mouvement de libération des femmes, MLF) においてであった<sup>6</sup>。MLFは幾つものことを成し遂げた。1971年には中絶の合法化を求める請願書「343人のマニフェスト」<sup>7</sup>を『ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール』に掲載し、1973年に避妊が、1974年に中絶が合法化されるための道を開いた<sup>8</sup>。MLFの創始者のひとりであり、ロラン・バルトやラカンの理論を学んだアントワネット・フークは、出版社「デ・ファミン (des

<sup>3</sup> なお、クリステヴァはポーヴォワールを入れて20世紀フランスにおけるフェミニズムを3つの段階に分けている (Kristeva, 2016, 16)。

<sup>4</sup> 『第二の性』第1巻は出版された週に22000部の売り上げがあった (Laubier, 1990, 17)。

<sup>5</sup> ただし、この時期のフランスにも女性運動を準備する思想的動向はあった。MLF内部で開かれた精神分析と政治に関する会合「プシケポ」に限定すれば、フークは、60年代に自らが学んだバルトやラカンを68年以前の「素晴らしい思想の運動」として述べている (Langautier, Pascal de / Warren, Inès de, 2018, 74)。

<sup>6</sup> MLFとポーヴォワールの関係に関しては、次のものを参照。“The MLF and the Bobigny Affair”, in A. Simons, Margaret / Timmermann, Marybeth, 2015, chapter 9および Rodger, 2000.

<sup>7</sup> Le “Manifeste des 343 salopes”, in *le Nouvel Observateur*, n° 334, le 5 avril 1971.

<sup>8</sup> 通称「ヴェイユ法」と呼ばれる。

femmes)」を創設した。

しかしMLFは決して一枚岩の運動ではなかった。フークはMLFの発足当初から女性解放運動が「フェミニズム」であることを拒否した。その背景には、男性の権利をモデルとし、男性と同じ権利を要求することで性差の問題を解消しようとする運動から自らの議論を区別し、性差を肯定的に捉えようとしていたことがある。しかし他方で、ボーヴォワールの議論を受け継ぎつつも社会的性差の意味を検討し直し、社会学的立場から実践を重視するクリスティーヌ・デルフィのように、性の差異はただちに不平等であると考え、その解消を目指す運動にたずさわりつつ、自らをフェミニストと呼ぶ者たちもいた。以下において、MLFの発足の状況を確認したうえでMLFに携わっていた人々の性差に関わる議論の争点を明確にし、MLFが提起した「差異」と「平等」をめぐる思考を検討していきたい。

## 2. 抑圧への気づき — MLFの発足

1968年5月13日、学生たちによってソルボンヌ大学が占拠された<sup>9</sup>。この日フークは、作家として既に地位を確立していたモニク・ヴィティッグ、ジョジアヌ・シャネルらと共に、男女ともに参加可能な「文化活動革命委員会」(Comité révolutionnaire d'action culturelle, CRAC)の集会に参加していた。フークは当時32歳で、文学、政治学、精神分析学をおさめた文筆家であり教師であったが、これがはじめて主体的に政治活動に携わった経験であったという。CRACは「誰にでも」開かれた、言論による「相互的な創造の関係」を目指すものである。したがってフークやヴィティッグらは、この時点では、女性運動を創始しようと思っていたわけではなかった。フークは、1968年の時点においてはアメリカのフェミニズムが急成長してきていたことも、フェミニズムが何であるのかも全く知らなかったと述べている (Fouque, 1990, 126)。

1968年の学生および労働者たちの運動について、「68年5月とはまず、沸き立つ熱狂、言葉の爆発、叫びであった」(Fouque, 1990, 122)とフークは振り返る。彼女たちはこの運動を通して、他の学生や労働者たちと同じように、権威に対する抵

<sup>9</sup> 1968年5月に関しては、『ブランショ政治論集』に西山雄二が寄せた訳者解説を参照(『ブランショ政治論集』月曜社、2005年、218-226頁)。

抗を言論の形で表明することに賛同していた。ところが彼女たちはすぐに、1968年5月の運動は女性を抑圧するものであり、実際の活動において女性を排除するものだと感じた。フークは次のように述懐している。

5月とは思考の解放であり、人生において一度だけ到来しうるかもしれない出来事であり、閉鎖状態ないし思考することの禁止からの脱出であり、根底的な変化の、生のいぶきである。それは私の歴史的誕生なのだ。しかしモニクとともに私たちが確認したのは、「権力は銃口から生まれる」、そして「権力はファルスから生まれる」と書かれた数々のピラ<sup>10</sup>が宣言しているように、この革命が男性的であり、女性たちはそこで自ら意見を述べることができないこと、革命において主たる役割を果たすのはファルスであるということだ。青年たちは敷石を投げ、諸活動と組織を先導する。女性たちはナルシスト的でファルスのこの戦闘的運動において、印刷機の前、さらにはベッドに追いやられ、総会で発言することは無いというのに。(Fouque, 2008, 19)

問題は、68年5月の学生運動のように、参加者の平等を謳い実践的な活動に携わる場においてまさに抑圧が生じていると当の参加者たちに感じられたということだ。「敷石を投げ」、活発に発言し、運動の渦中にある男性たちが、フークらの被抑圧の感情に気づくことは難しかったであろう。もしくは、そうした男性たちを支える役割を暗黙のうちに当然のものとして自らに課した女性たちが、抑圧されていると感じている女性がいると気づくこともまた少なかったであろう。実際には女性アナキストもいたというし(西川, 2011, 224)、ソルボンヌには託児所もあった(西川, 2011, 181-182)ということであるから、おそらく抑圧を感じていない人々は、男女が共に活動していると思っていたはずである。しかしそのような見せかけの平等のもとでまさに抑圧の現象が起きており、そして抑圧の感情として、ある女

<sup>10</sup> 「権力は銃口から生まれる」という言葉は、『小さな赤い本 (*Le Petit Livre rouge*)』という題で仏訳が流布していた毛沢東の語録からとられた(『毛沢東選集』第二巻1938年11月6日「戦争と戦略の問題」より)。フークによると、この二つの落書きが「ソルボンヌや、カルチェ・ラタン、そしてヴァンセンヌの壁を樂しげに覆っていた」ということだ(Fouque, 1990, 133)。

性たちに経験されていたということは注目に値する。

彼女たちは、この被抑圧の感情の経験が性差の問題の核心に触れるものだとすぐに気づいた。抑圧されていると感じている側が声を上げるしかたを、彼女たちは既に68年5月から学んでいた。しかしこのとき彼女たちは、68年の学生運動自体が抑圧-被抑圧の構造を孕んでいること、そして階級闘争は性差に由来する抑圧-被抑圧の構造を解決するには十分ではないということも学んだのだ。フークらは夏休みに、女性運動の集会を10月に開くことを決めた。メンバーはそれ以降マルクスやエンゲルスおよびフロイトやラカンのテキストの批判的読解を行い、集会を開き、議論を重ねた。公の場にMLFが登場したのは1970年の春<sup>11</sup>、ヴァンセンヌ実験大学センターにおいてであった。

このような事情を鑑みるならば、「68年の足跡においてMLFは生まれた」(Fouque, 1990, 127) というフークの言葉は、単に1968年5月の運動をきっかけとしてMLFが発足したという時系列的な事実以上の内実を含意している。MLFは女性解放の目的を持つ女性の知識人の先導によって創設されたというよりはむしろ、1968年5月の運動における、気づかれにくい被抑圧の現象の結果として生じたのだ。「まず叫びがあり、叫びとともに、身体がついてきた」(Fouque, 1990, 122) という彼女の言葉は、MLFが抑圧された身体の解放をまず求めていたこと、そして、MLFが全てのひとびとのための運動から差異化してきたことを告げている。

こうして、男女が共に戦う場であったはずの学生運動は、女性のみ新たな運動の契機とならざるを得なかった。平等を謳うことによってむしろ差異と抑圧の現象が覆い隠されてしまう状況において当時彼女たちが成し得たのは、女性のみ活動の場を作ることであった。それは同時に女性解放運動からの男性の排除につながった。フークは、「ほとんどの制度から締め出されていた私たちは、その排除を浮き彫りにするために、またそれらと自分たちを対立させることで自己を設定するために、男性を排除した。実際それ以外どうすることもできなかった」(Fouque, 1990, 123) と述べる。

<sup>11</sup> フークはインタビューで、1970年3月30日がデビューであると述べている (Fouque, 1990, 127)。ただし、ヴァンセンヌでは4月21日、5月5日、5月21日にも大規模な集会が開かれており、資料によってMLFのデビューとされる日は異なる。

ただし、MLFは単に男性を敵として想定していたのではなく、権威としての「男性性」を敵としていたことに注意しなければならない。「男たちと戦うことが問題なのではない。そうではなく、男性性、女たちの中にも無意識にしばしば存在する男性性とさえも戦うことが問題なのだ」(Fouque, 2018, 36) とフークは述懐している。フークにとって「男性性」とは、権威と抑圧の象徴であり、異質な性を排除する働き、もしくは異質な性を同化する働きそのものであった。68年以降、この働きに対して、「男性性」に対して異質なものとされる性をアイデンティティとして認めるための理論をつくるのがフークにとっての課題となったのである。この課題は「プシケポ (Psy et Po)」(Psychanalyse et politique : 精神分析と政治) と呼ばれるMLF内部の会合の中で、ジュリア・クリステヴァ、サラ・コフマン、リュス・イリガライといった論者たちによって発展させられていくことになる。

### 3. MLFのもうひとつの起源

実のところ、1968年に活動していた女性団体は、MLFのみではなかった。ソルボンヌ大学で社会学を学び、アメリカ留学を経て帰国していたクリスティーヌ・デルフィはこの年、MLFの存在を知らないまま、アンヌ・ゼレンスキーおよびジャクリーヌ・フェルトマン＝オガゼンが1967年秋に創始した「女性的なもの・男性的なもの・未来」(Féminin, masculin, avenir, FMA) という名のグループに参加した。次第にこのグループの考えは抜本的なものとなり、翌年「フェミニズム・マルクス主義・活動 (Féminisme, marxisme, action)」と名を変えたが、革命運動が下火になるにつれて人数が減少し、1970年の春にはデルフィを含む4人のメンバーが残るだけとなった (Delphy, 1991, 139)。

MLFの側では、ヴァンセンヌにおける公の場での登場と時を同じくして、1968年10月からMLF内でなされた議論を統括した、「女性解放のための闘い」<sup>12</sup>という題名の報告が、ヴィティッグ姉妹および二人のアメリカ人女性の署名で発表されていた。「女性解放のための闘い」には、男性たちによって導かれた既存の革命組織とは異なる、「女性たちの運動」によって「ブルジョワジーのイデオロギーに直

<sup>12</sup> Monique Wittig, Gilles Wittig, Margaret Stephenson, Marcia Rothenburg, « Combat pour la libération de la femme » in *L'Idiot international*, mai 1970, n°6, p. 13-16.

接立ち向かう」ことの必要性が明記されていた。ただしデルフィが伝えるところによると、フークは、女性たちの抑圧に関する「完全な」理論を練り上げる前にMLFのグループを拡大したり論考を出版したりすることには反対していたらしい(Delphy, 1991, 140)。じっさい、MLFが世に知られるようになったきっかけのひとつである「女性解放のための闘い」は、フークおよび他の幾人かのメンバーが知らないうちに発表された。ゼレンスキーやフェルトマン＝オガゼンはこの論文を読み、著者たちに手紙を書いた。このことがきっかけとなってフークはデルフィに連絡を取り、FMAはMLFと共に活動するようになった。このような経緯でMLFに携わったことから、デルフィにとって、MLFとは複数の女性団体の集合を意味している。そしてデルフィはフークらをMLFの起源とみなすことに対して強い抵抗を示すようになった<sup>13</sup>。

フークは、MLFにひとつの団体としての地位を与えることで、この運動を他の社会運動から差異化しようとしていた。フランスで「フェミニズム」という語を用いる際には、歴史的に付加された、平等のために男性をモデルにして女性の地位を引き上げるといった意味合いが含まれざるを得ない<sup>14</sup>。男女関係を問い直すにあたって、フークは抑圧の構造を解明しようとするのであるが、こうした抑圧の構造は、男女同権を求める運動によっては十分に解消されることがない。それゆえにフークは、「フェミニズム」という語を用いることを拒否していた。ただし、MLF

<sup>13</sup> デルフィはMLFの起源として、1970年における以下の4つの出来事を挙げている。(1) 「女性解放のための戦い」の発表、(2) 1970年5月21日における、フークが創設したMLFを含む複数のフェミニスト団体の集まり——そこには「女性解放ゼロ年」と書かれた横断幕が掲げられていた——、(3) 1970年8月20日凱旋門においてアメリカのフェミニストたちを含む複数の女性団体によって行われた、無名戦士の妻に花束を捧げるという活動、(4) 1970年11月に雑誌『パルティザン』において特集「女性解放ゼロ年」が組まれたこと(Delphy, 1991, 138)。ただし、この「ゼロ年」はMLFの最初の2年を無視するものだと、1968年からのメンバーには『パルティザン』特集に参加しない者も多かった(Fouque, 2008, 52)。初期メンバーにとって、1970年の出来事はMLFの拡大と受け取られる。なお、デルフィは後にフークが1979年にMLFを商標登録したことを糾弾するようになる(Delphy, 1980, 10)。

<sup>14</sup> フランスにおいて「フェミニズム」という概念用語が含む意味内容については、『女たちのフランス思想』の編者解説(柗沢、1998、282)を参照した。

内部に既に分裂が起きていたことは明らかであり、MLFの全てをフークが把握していたわけではない。このことを指摘したデルフィはMLFを誰か特定の人物に帰属することのない大きな社会運動として、まさしく「フェミニズム」として捉えることで、MLFの内部からフークとは異なる道を歩みだす。デルフィは、「序列が差異に関する基礎を形作る」(Delphy, 1993, 38) と考え、性差と序列の形成を不可分なものとしなしたうえで、性差の解消と平等をいかに表明することが可能かという問いに答えようとしていたのだ。

#### 4. 「平等」をめぐる — デルフィの「家父長制」批判

デルフィは1970年に論文「主要な敵」<sup>15</sup>を発表した。この論文はデルフィの主張の核心を示しており、その後のデルフィの研究の土台となっている。デルフィはこの論文で、「なぜ資本制的生産関係を廃止しても女性たちを解放するには十分でないのか」という問いに構造的な理由を見つけだすことの理論的必要性、そして「女性運動を自律的勢力として確立する」ことの政治的必要性を訴えた (Delphy, 2016, 57)。そのためにデルフィは「家父長制的搾取」を女性運動にとっての主要な敵と捉え、「女性に共通、特有かつ主要な抑圧」とみなしてその内実を分析する (Delphy, 2016, 73)。

デルフィによる家父長制批判は、フークの考えていた女性の抑圧の構造の分析とは全く異なるしかたでなされる。フークは、後に「女の主要な敵は家父長制だと考えたことは一度もない」と述べる (Fouque, 1990, 134)。フークは、戦うべき相手を、「父」を倒した後に、ア priori に女たちを排除する「息子権制 (filiarcat)」に見出す (Fouque, 1990, 134)。フークはこのとき1968年5月を「息子としての息子たちの最初の集会」と述べている。「息子」とは、「自己の分身、反映、双子、兄弟、今いる仲間だけが評価に値する」(Fouque, 1990, 133) という論理、すなわち同一化する (s'identifier) 論理であり、フークはこの論理と戦おうとしていた。この論理において「父は存在しない」(Fouque, 1990, 133) のであり、フークにとって家父長制ははじめから問題とならなかった。

精神分析の枠組みを用いて同一化の論理の危険性と戦おうとしていたフークに対

---

<sup>15</sup> Christine Delphy, "The Main Enemy", in Delphy, 2016, pp. 57-74.

して、デルフィが戦おうとしていたのは、性の分割による二層化の危険性、つまり男性と女性の分割が必然的に「階級」として捉えられることに対する危険性であり、デルフィはこれを生産と消費の場面から考えようとしていた。デルフィは「家父長制」という語を、家庭内における女性の無報酬労働によって、市場から経済的な行為主体としての女性を排除し抑圧するシステムとして捉えている<sup>16</sup>。この用語を彼女は古今東西におけるさまざまな社会に見出すことのできる制度としてではなく、1970年当時の「ここにおける、現在の」ものとして提示することが重要であると考えていた (Delphy, 2016, 21)。また、彼女はプロレタリアの抑圧の結果として女性の抑圧を考えることを、女性の階級分析を妨げる欠陥であると考えている (Delphy, 2016, 57)。デルフィの議論において、「女性」は、家庭内における無報酬労働を担うべき役割を果たす、より価値の低い存在者であるとみなされている。そして、そうしたことがいかにして生じるかを分析することが、デルフィにとっての課題となる。

したがって、「女性」とは何かを考えるときには、資本主義において搾取される労働者の抑圧を考えるのとは異なるアプローチが必要になる。家庭内で担われる育児と家内サービス、そして家族内で消費される生産物の生産、さらには農場や小規模の小売商ないし小規模の手工業の場において、不払い労働が生じている。そしてこの無報酬の労働の担い手は主人の妻、妹、弟、子供なのだ。デルフィはこのような状況において、年若い男性の不払い労働には異議が唱えられるのに対して、女性の不払い労働は制度化されたままであるということを指摘する (Delphy, 2016, 62)。女性の労働が家庭内において無報酬であることを肯定し、市場における女性の価値を低いものとみなすシステムこそが、賃金制の資本システムと区別された「家父長制」であり、女性の抑圧を理解する上で重要な要因となっているとデルフィは考えるのである。

デルフィは、権力関係とは無関係に性のカテゴリーが存在するという考えを虚構

---

<sup>16</sup> のちにデルフィは「家父長制とフェミニズム、それに関わる女性知識人」という論考を著した。そこにおいてデルフィは「家父長制」という語の歴史的使用例とその用法の変遷を明らかにしている (Christine Delphy, "Patriarchy, feminism and their intellectuals", in Delphy, 2016, pp. 129-143)。

のものとみなして、「性」と「性役割」を同一視していく。「女性」と「男性」を二分法によって分類し、二つの間に構造があると見ること自体が社会的序列を形成すると考えるのだ<sup>17</sup>。ゆえに彼女は性差を肯定することがない。「ジェンダーがセックスに先行する」(Delphy, 1993, 36) ののであって、その逆ではないとデルフィは考えるのである。こうした理由から、「人は女に生まれるのではない」というボーヴォワールの言葉をも、生物学的差異を前提した言葉として、デルフィは批判する。デルフィは性差に由来する不平等の構造を分析することで、女性解放運動の目的を明確にする。女性解放運動は、性のカテゴリー自体を解消することで、不平等をなくしていく方法を模索すべきであると考えているのである。

##### 5. 「差異」をめぐって — 同性愛に関する会合

デルフィが考えるように性差とは既に社会的なものであって人間のあり方を生まれつき決定づけるものではないとすれば、性差は個人のアイデンティティとは無縁の所産であることになろう。しかしデルフィの問題設定は、性差に由来する抑圧に悩む人々の問いに十分に答えるだろうか。おそらくはデルフィの目論見は不十分なものととどまる。というのも、性差の問題の経済的側面を家父長制というモデルから分析しているため、デルフィの理論は家庭内における性役割に関する事柄に限定されているからだ<sup>18</sup>。

それでは性差について語ることは何を意味しているのか。この問いを考える際に、フークの提案によってMLFが1970年10月に、フランスで初めて同性愛につい

<sup>17</sup> 「セックスとジェンダーについて考える」において、デルフィは「今ある男性的および女性的な諸価値の総計ないしは組み合わせとして、未来の平等社会にある諸価値を想像することはできない」と述べている (Delphy, 1993, 40)。

<sup>18</sup> D・コンブとA・M・ドゥヴルーは、論考「性的社会関係概念——その起源、構築、利用」(柵沢、1998、pp. 65-116。本稿は、日本語で出版される論集のために書き下ろされた)にて、デルフィを論じながら、「女性抑圧の原因が資本主義であるかのように資本主義が消えれば女性抑圧も消えるという考えと闘うことは必要」であることを認めつつ、「このフェミニスト的批判は、自分が参考にしたマルクス主義理論と同じ限界にぶつかっている」と指摘する。というのも、この理論は「生産という行為者の固有の動きを無視したためシステムの変化を考慮していない」からである (柵沢、1998、78)。女性が家庭外の給与と所得者である場合についての考察はデルフィにおいてはなされていない。

ての政治的会合を開いた（Fouque, 2018, 78）こと、そのしばらく後には「革命的同性愛者活動戦線」（Front homosexuel d'action révolutionnaire, FHAR）が結成されたことは注目に値する。フークは、「万人が、その愛と性の実践がいかなるものであれ、この運動において市民権を持つことができるようになるため」<sup>19</sup>に、この会合を開くことを決めた。その背景には、MLFは男女非混成的グループであることを重視していたので、MLF自体が政治的には一種の同性愛的な結びつきがあると彼女たちが自ら認めていたということがある。最初の会合の報告によると、同性愛グループであるアルカディ（Arcadie：1954年創設）のメンバーもこのとき参加している。アルカディには当時11500人の男性の同性愛者および350人の女性同性愛者が所属していた。会合の場においては異性愛者の側が少数者となり、自分たちが抑圧されていると感じたということだ（Fouque, 2018, 81）。もちろん、多数者であることがそれだけで抑圧を形成するというわけではない。しかし、ここで経験されているのは、性的多数者であるということがそれ自体抑圧者となりうるという事実である<sup>20</sup>。

同性愛の問題に着目することは、異性愛者によって抑圧されがちな性のあり方に目に向け、性の多様なあり方を認めることにつながるだけではなく、性に内在する権力構造を浮き彫りにすることを可能にする。1971年にはモニク・ヴィティグらによって、女性同性愛者のみからなるグループ「赤いレズビアン（Gouines Rouges）」が、異性愛者を受け入れていたFHARとは別に結成された。その宣伝用ビラには次のように書かれている。

同性愛者であることは、現実の男性／女性の諸関係、運動が全面的に今拒絶するこの同じ関係に対する具体的な反抗である。同性愛の抑圧は、性的関係においてあらゆる女性が受けてきた抑圧……つまり男性支配と同じ性質に由来してい

<sup>19</sup> 月刊誌である*des femmes en mouvement*, Midi-Pyrénées, n°1, mai 1982. を参照。

<sup>20</sup> ただし、フークによると、社会において同性愛は疎外され、周縁的なものであり抑圧される立場であったが、同性愛という問題においても男性と女性の間には扱いの差異があった。男性の同性愛は犯罪であるとされている。それにもかかわらず、女性の同性愛については刑法の中では触れられていない。社会の中で女性の同性愛は隠され、存在しないものとしてみなされていたのだ（Fouque, 2018, 81）。

る。同性愛者であることは、規範とは異なる新たな社会関係を創設する可能性である。……同性愛の抑圧は、異性愛のうちにある、つまり男性に対する依存のうちにある女性を強くする。(Fouque, 2018, 82)

性的関係は男性と女性の関係として論じられるのみではもはやない。男女からなる性的関係はさらに差異化され、一対の男女、あるいは男性と女性が形作る家庭を基準として性を論じることは不十分なものとなる。同性間の抑圧は性的な抑圧として可視化されづらいが、同性間でも紛れもなく性的抑圧は生じうる。「異性愛者の女性」「異性愛者の男性」もしくは、「同性愛者の女性」「同性愛者の男性」さらには「バイセクシュアル」などに性は細分化され、「異性愛者の女性」と「同性愛者の女性」の間でも抑圧が生じうるのである。

1968年5月において表面化した問題とは、性差について語らずに、むしろ平等を標榜しているときにこそ、気づかれないままに性に由来する抑圧が生じうるということであった。では、MLFがなしたように性差について語り、性に関わる区分を細分化していくことによって抑圧は解消されるのだろうか。実は、そのように問題を可視化している最中に抑圧が生じてしまっていること、また女性解放運動の枠組みを超える性の問題が生じていることを、同性愛の会合はあらわにする。問題なのは、女性と男性の差異を尊重し、もしくはその差異を解消することであるというよりはむしろ、抑圧の構造を多くの視点から捉えること、そして差異化の運動に対して求められる平等をどの次元に見出すかを思考することなのである。

## 6. 結び

本稿ではごく初期のMLFの活動を中心に扱ってきた。MLFの一方には、フークのように平等の観念には限界がある<sup>21</sup>と考え、平等を唱えるのみでは性差に由来する抑圧は解消されないと考える人々がいる。この考えを推し進めたイリガライは1977年に『ひとつではない女性の性』を発表し、一つのモデルを想定することの

---

<sup>21</sup> ただし、フークは「差異の土台には平等がある、いやむしろ差異を活性化するのは平等である」(Fouque, 1990, 128)としており、平等を重要なものとみなしていることには変わりない。

ないアイデンティティの形成を論じた。フークの思想はのちに『二つの性がある』（1990）に結実する。他方には、デルフィのように、性差をすべからず社会的性差とみなすべきであるとし、その不平等を告発することで性役割の平等化を求める人々がいる。性差を尊重すべきなのか、あるいは性による区別を廃止すべきなのか。MLFのあり方を考える際に、こうした問いを避けることはできない。また、MLFがその後さらに多様化していくことを考慮するならば、本稿が扱った時期において、問題は意識されるようになったばかりであるということに言及しなければならないだろう。いずれにせよ初期MLFの功績は、「女性解放運動」が階級闘争によっても、また男女同権を求める運動によっても汲み尽くせないことと示したこと、そして、性に由来する抑圧をいかに思考し表象しうるかという問題を明らかにしたことにあると言えよう。

#### 参考文献

- Delphy, Christine, (2016), *Close to Home, a Materialist Analysis of Women's Oppression*, translated and edited by Diana Leonard, University of Massachusetts Press, 1970/1984/2016.
- (1993), « Rethinking Sex and Gender », in *Sex in Question: French Materialist Feminism*, edited by Diana Leonard and Lisa Adkins, Taylor and Francis, 1996/2005.
- (1991), « Les origines du mouvement de libération des femmes en France », in *Nouvelles Questions Féministes*. N° 16/18, pp. 137-48.
- (1980), « Libération des femmes au dix », in *Questions féministes*, février 1980, N° 7, pp. 3-14.
- Fouque, Antoinette, (2018), *MLF psychanalyse et politique; 1968-2018, 50 ans de libération des femmes, volume 1. Les premières années*, des femmes.
- (2008), *Génération MLF, 1968-2008*, des femmes.
- (1990), « Femmes en mouvements: Hier, Aujourd'hui, Demain. Entretien avec Antoinette Fouque », in *Le Débat*, Gallimard, n° 59, p. 122-137.
- Jackson, Stevi, (1996), *Christine Delphy*, SAGE Publications Ltd.
- Kristeva, Julia, (2016), Beauvoir Présente Fayard.
- Laubier, Claire, (1990), *The Condition of Women in France: 1945 to the Present. A Documentary*

*Anthology*, Routledge.

Rodger Catherine, (2000), « Elle et Elle: Antoinette Fouque et Simone de Beauvoir », *MLN*  
Volume 115, N° 4, septembre 2000, pp. 741-760.

Langautier, Pascal de / Warren, Inès de, (2018), *Femmes et filles*, L'Herne.

A. Simons, Margaret / Timmermann, Marybeth, (2015), *Simone de Beauvoir. Feminist Writings*,  
University of Illinois Press.

棚沢直子編、『女たちのフランス思想』(1998)、勁草書房

西川長夫、『パリ五月革命 私論』(2011)、平凡社

モーリス・ブランショ、『ブランショ政治論集 1958-1993』安原伸一郎／西山雄二／郷原佳  
以訳 (2005)、月曜社